

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	山岳部報告 : 部報
Author(s)	小早川
Citation	龍南, 246 : 80 - 81
Issue date	1940-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8400
Right	

部 報

山 岳 部 報 告

今年度中の経過を略記して報告とする。一學期中は阿蘇の岩場を歩いて時に小屋で夜もねず雑談をする。明方二三時間うつら／＼したと思ふと／＼たる風の音ままフォルストンの音が不氣味に小屋まで達する。山の手料理は大抵うまいことになつてゐる。

夏休は計畫豊富すぎて、全部やれなかつた。人員が過少であるから仕方がないとしても、もつと部員が多くなるといい時に思ふ。幽霊は足がないから歩けない。一班は屋久島に行く。四人、颱風で船が出ず、汚い宿屋に二日閉込められてさすが辟易。漸くボンボ船の船底にえびの様に体を縮めることが出来た。窮屈なので甲板に坐る。潮水で炊いた飯を食つたが案外うまかつた。山では頂上近くの純水で食つたが。

屋久島について一言する。小學校の教科書には八重嶽と出て居た様であるが、實に宮之浦岳、永田岳、馬味岳、高盤岳、等に連山をなしてゐて本土の山貌とあまりちがはないが唯涯溪なく連なる山嶺高原平野河川がなくて白雲と藍の海が山の間から見立ることである。山岳部としては足樹十三年にわたつて遠征を續行し來り、この夏を以て一先づ打切りとして、報告の準備をしてゐるが、時局柄當局の檢閲等の爲地圖を改めさせられたりして思ふ様に仕事が進まない。

近年登山並びにスキーが大變盛となつたがなにか衣裳の流行を追ふと同軌の傾向が感じられることもある。アルピニズム、登高精神などと云ふ言葉を私一個としてはあまり好まないがそんな心掛はないと思ふ。

夏には濟洲島にも三人行つてゐる。何分部としては最初であるのでリーグは充分慎重な計畫を立てて行つたので大体成功してゐると確信する。以上二つは何れも二週間前後を費した。その他の計畫は颱風や、夏休が早く始つたため期日の思ひ違ひ等色々の支障で全部止めた。

二學期も又土曜の暇をぬすむ様にして阿蘇の岩場に出掛

る。冬又支障あり。

三學期早々一年生二人で根子嶽の西屋根縦走をやつた。

霧氷があつてきれいだつたとのこと。

近年ない大雪でスキーが俄然人々の口に上り、部のスキ

ーも部員、部員外、全部貸出してしまつた。

技術も山登りには必要であらうが、技術ばかりでは山を愉しむことは出来ない。技術が一つの智慧である様に、山を愉しむことは一つの膚知である。それかと言つて困難な岩場を歩かなくてもよい。高岳を目指さなくてもよい。自ら「山」あり、谷はある。高原を歩くことは、溪谷をよぎることは又大きな愉しみである。純粹で尖鋭を以て誇る科學的アルピニズムの徒はかかることも感傷だと云つて推さないであらうが、ヒマラヤの頂上を究めるには飛行機でとせば譯はあるまい。

山を登つて文化の形態にそれほど貢獻はすまいが、全て人間の心の働きがそうである様に、山に登つて人は文化のなにかの基礎を歩いてゐる。山歩きは原始の姿を求めると言ふ。原始とは文化の根抵でもあらう。現文化の段階から見では行動の一つとも思はれる。

(小早川)

柔道部々報

東亞の新秩序も未だ遠く、西歐に雲亂れ飛ぶ混沌たる中に、皇紀二千六百年の光輝ある年をむかへ、日本臣民としての責任の重大なるを痛感すると共に、部員一同も三年生の方々を御送り致しまして、來るべき夏の大會を望んで、寒風の下にひたすら精進して居ります。

さて我龍南會柔道部が過去に於て、先輩の方々のそれこそ血と涙につゞられた榮えある戰蹟を残して行かれました。ひるがへつて自己の現在の部生活を考へる時に、果してこの道場の隅々にまで浸みこんでゐる、傳統と歴史を繼ぎ得るか無條件に肯定出来ないのを残念に思ひます。しかし我々は徒らにかく焦燥するよりも、意氣と熱換言すれば内からわきおこる鬱勃たる精神力をもつて、かく肯定出来る様に努力するのが、部生活をやつてゐる自分としての當然やるべき事、約言すれば傳統と歴史を自己の中に活かす事だと信じます。部生活の意義も勿論文字にあらはされたる理論上の定義ではなくて、自分で具體的生活中に没入して、体得出来るものだと思います。